



巻 頭 言

東北特集号によせて

佐 川 敬*

まず東北特集号の刊行にお祝いを述べたい。永い歴史をへて洗練されてきた光学が白河以北にも定着しつつあるのかという印象は感動的だし、いわばその道の通の集まりである懇話会が支部的活動までなしうようになったことに敬意を表したい。

光学と聞くと直ぐに Born, Wolf の Principles of Optics の本を想像してしまうのであるが、これは、もちろん偏見というものであろう。事実電磁波に限定してもレーザーや SOR の出現は新しい optics を生み出しているし、まして電子やさまざまな荷電粒子のそれを含めれば光学が関与する分野は拡大の一途を辿っているといっても過言ではあるまい。会員の皆様のいっそうのご精進による素晴らしい成果をファンの一人として期待したい。

東北における光学の始まりは明治 44 年の東北大学の開学に遡る。物理学科の日下部四郎太教授がその人であると記憶するが、何といても重要な人物は同学科の本多光太郎教授の 2 代目である大久保準三教授である。奇しくも私自身は 4 代目ということになっているが、大久保先生は早くから光学の重要性と底の深さに着目され、今日では誰知らぬ者もない有名な科学計測研究所を設立された方である。昭和 18 年のことであった。以来同研究所ではたいへん特色豊かな業績を多々挙げておられるが、これも大久保先生以来の人まねでない、しかも稠密な研究の伝統によるものであろう。

こんな歴史的な話は巻頭言としてふさわしくなかったかもしれないが、重要なことはほんとうに自分の発想にもとづいて地味な努力を重ねることこそが真に価値ある独創的業績につながることを述べたかったわけである。世上ややもすれば華やかな成果のみに憧れ、その背後にあるむくわれることの少ない龐大な努力を無視しがちな風潮はまったく感心しない。大久保先生やその後の科研のあり方が一つの良い例ではないかと思う。

東北の人は古来良く辛苦に耐えるとされている。その意味では研究の土壤に恵まれている筈であるが、多くの分野で必ずしも先進的とはいいい難かったことも事実で反省すべき点であろう。果敢な冒険心と積極性がもう少しあっても良いような気がするが、これは筆者の思い過ごしであろうか。ともあれこの特集号が東北の光学のために、ひいては日本のそのために大いに役立つことを期待して筆を擱きたい。

* 東北大学理学部物理学科 〒980 仙台市荒巻字青葉